

ドイツにおける高齢者福祉施設の寮父母の介護意識

A research on perceptions of carework by careworkers in nursing homes and residential homes for the aged in Germany

三原博光・横山正博

Hiromitsu MIHARA and Masahiro YOKOYAMA

はじめに

わが国は、ドイツから様々な高齢者福祉施策を学んできた。それらは、わが国の介護福祉士のモデルといわれている老人介護士資格制度や介護保険などである。しかし、わが国の研究者は、このようなドイツの高齢者福祉制度や施策を紹介しているが^{1)~8)}、ドイツで実際に高齢者の介護に従事している寮父母の介護意識については、ほとんど紹介されていない。それは、ドイツと日本の文化的、歴史的価値観の違いを考慮するとき、人々の介護意識よりも、高齢者福祉制度や施策を紹介した方が抵抗なく一般的に受け入れられるのではないかと考えたと思われる。しかし、われわれは、わが国の高齢者福祉施設の寮父母にとっては、ドイツの高齢者福祉施策よりも、寮父母の介護意識に興味をもつのではないかと考えた。また、ドイツの高齢者福祉施設の寮父母の介護意識を紹介することで、わが国の高齢者福祉施設の寮父母の介護意識を新たに再認識できるのではないとも考えた。

以上の経緯から、われわれは、ドイツの高齢者福祉施設の寮父母の介護意識について調査を実施し、調査結果を得ることができたので、ここで報告することにした。

1. 方法

調査対象者：高齢者福祉施設の寮父母が調査対象となった。高齢者福祉施設は、特別養護老人ホーム3つ、養護老人ホーム1であった。

調査方法：ドイツ語に翻訳した調査用紙を各施設に配布し、記入を依頼し、後に、回収した。

調査期間：1997年2月から8月までであった。

質問項目：(1)基本属性(年齢、性別)、(2)介護職を希望する動機、(3)介護に対するイメージ、(4)介護のあり方、(5)他職種との比較、(6)介護に対する社会の評価、(7)海外の介護の情報について、など約20の質問項目から構成されていた。

2. 結果と考察

(1)基本属性

調査対象者数は30名であった。ドイツの調査対象者数が少なかったのは、調査の依頼ができた施設数が少なかったことに加えて、たとえ調査を依頼できたとしても、そこで勤務している寮父母数が少なかったことなどが原因としてあげられる。特に、ドイツは経済的不況から、施設においても経営上の理由から、寮父母の採用を抑制する方向にあった。したがって、わずか30名の少ない調査対象者から、ドイツの高齢者福祉施設の寮父母の一般的な介護意識について述べることができないが、この問題点を踏まえ、敢えて、介護意識について触れてみることにした。

各高齢者福祉施設の所在地は主に北ドイツであった。2つの特別養護老人ホームと養護老人ホームはドイツ国教会経営、もう1つの特別養護老人ホームは民間経営の施設であった。

寮父母の性別は女性が76.7%、男性が23.3%であり、男性も高い割合で高齢者介護に従事してい

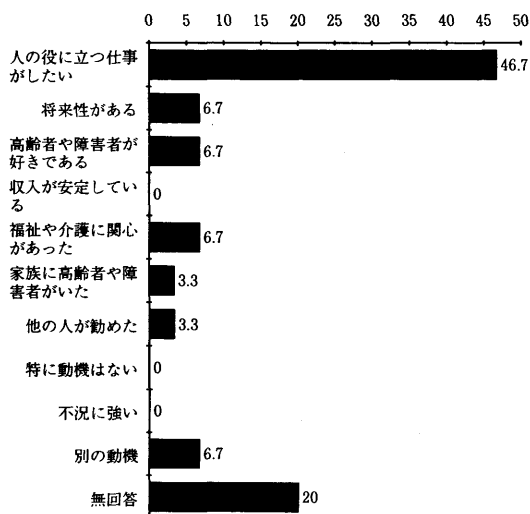
た。

平均年齢は41歳、最少年齢20歳、最高年齢60歳であった。年齢構成の割合は、20～29歳が10.0%、30～39歳が43.3%、40～49歳が20.0%、50～60歳が26.6%であった。この結果から、20歳代の寮父母の割合が少なく、逆に30歳代以上の寮父母の割合が高くなっているのが特徴的であることが分かる。

(2)介護職を希望する動機

①介護の仕事を選んだ動機（図1，参照）

図1 介護の仕事を選んだ理由



「人の役に立つ仕事をしたがりたいと思った」が46.7%と最も多く、次いで「将来性があるから」6.7%、「高齢者や障害者が好きであるから」6.7%であった。また、「福祉や介護に関心があった」の回答はわずか6.7%であった。

寮父母の多くは「人の役に立つ仕事をしたがりたいと思った」ということが、介護の仕事の選択の動機づけになっている。これは、調査対象となった福祉施設のなかに、ドイツ国教会が経営しているものも含まれており、キリスト教の隣人愛の思想が影響を与えていると思われる。また、ドイツでは、「家族に高齢者や障害者がいたから」と答えたものは、わずか3.3%であり、家庭環境が介護職の

動機づけに、それ程影響を与えていないことが分かる。これは、ドイツでは若者は中学校や高校を卒業すると、両親から離れて早く自立した生活を過ごすため、家庭で祖父母と同居する機会の少なさが原因として考えられる。

(3)介護の仕事に対する評価（複数回答可）

①仕事のやりがいは、何であるか。

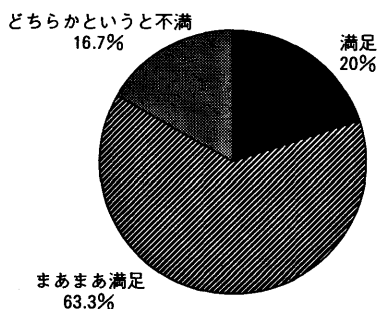
「入所者の状況の変化」90.0%、「入所者および家族からの感謝、信頼」60.0%、「介護技術の向上」50.0%であった。この結果から、寮父母は入所者の改善のために仕事の意義を見出そうとしていることが分かる。

②職場の設備に満足しているか。

「まあまあ満足している」56.7%、「満足している」16.7%、「どちらかという不満である」16.7%であり、約73%の寮父母は職場の設備に満足している。

③職場の人間関係や雰囲気満足しているか（図2，参照）

図2 職場の人間関係や雰囲気に満足している



「まあまあ満足している」63.3%、「満足している」20.0%、「どちらかという不満である」16.7%であり、約83%の寮父母は職場の人間関係や雰囲気に満足している。

④転職を考えたことがあるか。

「全く考えていない」36.7%、「あまり考えない」26.7%、「ときどき考える」26.7%（8名）であり、約63.4%は転職を考えていなかった。これは、寮父母が職場の設備や人間関係に満足しているた

めなのか、あるいは施設における雇用状況の難しさによって、転職を考えていないのかどちらかであると想像される。

⑤転職の理由（転職を考えたと回答したもののみ）「腰痛など体調をこわす」20.0%、「勤務時間の不規則」3.3%、「昇進等の将来性がない」3.3%、「無回答」73.3%であった。寮父母の主な転職の理由は、健康上の問題によるものが多く、ドイツにおいても介護が重労働であることが分かる。ただ、無回答が約7割も存在しており、この回答結果については、今後の検討が必要であろう。

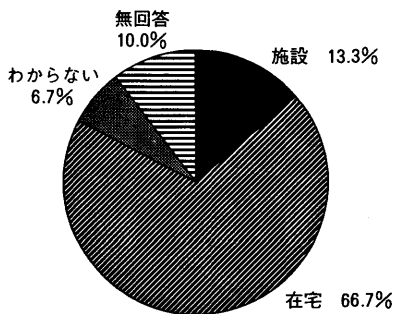
(4)介護のあり方に関する質問

①高齢者の介護は、施設よりも家庭でもっと行うべきであると思うか。

「強く思う」が23.3%、「まあまあ思う」43.3%、「あまり思わない」16.7%、であった。寮父母の約66%は、高齢者の介護は施設よりも在宅が良いと考え、施設での生活が高齢者にとって、必ずしも好ましいと考えていないようである。

②高齢者の終末期を迎える場所は、どこが適切であると思うか（図3、参照）

図3 高齢者の終末期を迎える場所はどこが適切か



66.7%が「在宅」、「病院」0%、「施設」13.3%であった。寮父母は、高齢者の終末の場所は、在宅が望ましいと感じているようである。ただ、「施設」と答えたものが約13%存在しており、一部の寮父母は高齢者の終末が在宅では困難であると現実的に考えている。

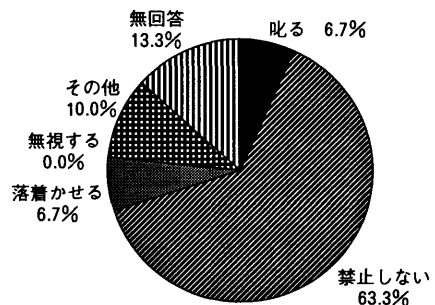
③ターミナルケアについて、もっと学習する必要

があると思うか。

「強く思う」56.7%、「まあまあ思う」33.3%であり、約90%の寮父母はターミナルケアの学習の必要性を感じている。寮父母の介護業務のなかでの実体験が、このような高い数値の回答結果に影響を及ぼしているのであろう。

④痴呆性高齢者の徘徊行動に対して、どのような対応が必要と思われるか（図4、参照）

図4 痴呆性老人の徘徊行動に対して特にどのような対応が必要と思うか



「その行動を禁止しない」63.3%、「薬などによって落ち着かせる」6.7%、「無視する」6.7%であった。寮父母は、高齢者の徘徊行動を寮父母の力で強制的に静めるのではなく、ある程度、高齢者の行動を自由に尊重すると考えているようである。これは、ドイツの個人の行動を尊重するという個人主義的思考方が影響を及ぼしているのかもしれない。特に「薬などによって落ち着かせる」と回答したものの割合が少なく、ドイツの寮父母にとって、徘徊行動の抑制のために、薬の使用に対する拒絶感は強いようである。

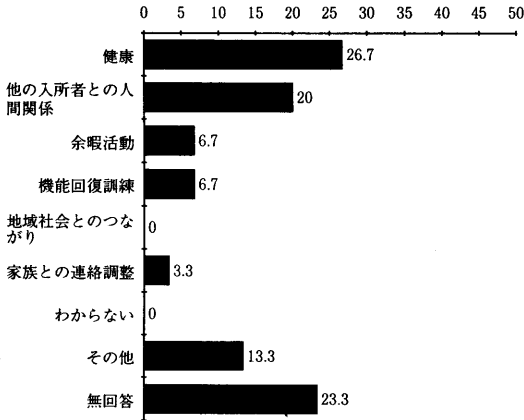
⑤どのような面に配慮して介護を実施しようと思うか（図5、参照）

「健康」26.7%、「他の入所者との人間関係の調整」20.0%、「余暇活動」6.7%であった。

寮父母は、介護業務のなかで、まず寮父母の健康状態の関連の把握が必要であるという介護の基本原則を認識している。しかし、ドイツでは「余暇活動」はあまり重視されておらず、「余暇活動」は入所者のプライバシーの問題であり、寮父

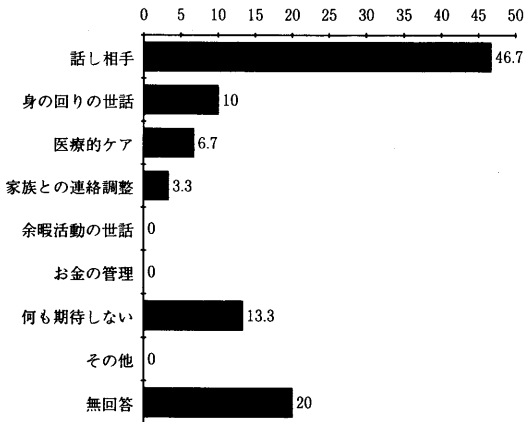
母の介入すべき事柄ではないと考えられているのかもしれない。

図5 特にどのような面を配慮して介護を実施しようと思うか



⑥あなたが老後を迎えたとき、寮父母から特に何を期待するか (図6, 参照)

図6 老後を迎えたとき介護者に特に何を期待するか



「話し相手」46.7%、「何も期待しない」13.3%、「身の回りの世話」10.0%、「医療的ケア」6.7%であった。

寮父母は、「話し相手」を期待し、コミュニケーションを重視していることが分かった。寮父母は実際の介護業務のなかで、コミュニケーションが

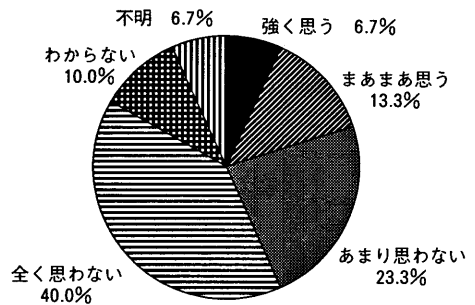
重要であると感じているのか、あるいは施設現場でコミュニケーションが不足しているため、コミュニケーションの重要性を感じているのか、どちらかであると思われる。ただ、「話し相手」の次に来る内容については、「何も期待していない」という回答がみられ、ドイツの寮父母は、老後の生活について虚無的に感じているのかもしれない。

(5)他職種との比較

①介護の仕事は、医師に従属する仕事だと思うか。「あまり思わない」30.0%、「全く思わない」10.0%、「まあまあ思う」23.3%であり、約40%は医師に従事するものではないと感じていた。

②介護の仕事は、看護婦に従属する仕事だと思うか (図7, 参照)

図7 看護婦に従属すると思うか



「全く思わない」40.0%、「あまり思わない」23.3%と、約63%は、介護の仕事が看護婦に従属する仕事ではないと考え、その数値は、医師の場合よりも高かった。これは、寮父母が看護婦に対しては、かなり強い対抗意識をもっていることを示していると思われる。

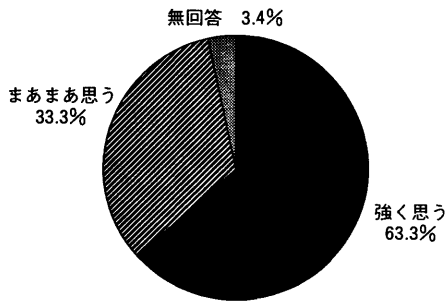
③介護の仕事が、他の専門職 (看護婦や作業療法士、理学療法士) などの仕事に比べて、社会的に高いかどうか。

「あまり思わない」と回答したものが56.7%と最も多く、次いで「全く思わない」が20.0%であり、全体の約76.7%は介護職が他の専門職と比べて高いと思っていないようである。

⑥介護に対する社会の評価

①社会の人々が、介護の仕事にもっと理解して高い評価を与えるべきか(図8, 参照)

図8 社会の人々が介護の仕事をもっと理解して高い評価をするべきか



「強く思う」63.3%、「まあまあ思う」33.3%であり、寮父母の約96%が介護の仕事にもっと理解して高い評価を与えるべきだと考えており、介護に対する社会的評価を熱望する気持ちがかなり強いようである。

②「地域の人々は、高齢者ホームを好意的にみていると思うか。

「思わない」60%、「思う」26.6%であった。多くの寮父母は、地域の住民が高齢者ホームに対して、偏見を持っていると感じている。これは、介護に対する社会の評価が低いことも関連し、地域の人々が高齢者ホームに対して好ましいイメージをもっていないと寮父母は感じていると考えられる。

(7)海外の介護の情報について

①ドイツの高齢者福祉は、外国(特に欧米諸国)の高齢者福祉の影響を受けていると思うか。

「思わない」36.7%、「思う」16.7%、「分からない」36.7%であり、明確な傾向が示されなかった。つまり、ドイツの寮父母達は、ドイツの高齢者福祉が外国の高齢者福祉の影響を受けていると感じていないのか、あるいはこの質問については明確な回答が出せないのかどちらかである。

②ドイツの高齢者福祉を進歩させるためには、もっと外国の高齢者福祉の情報が紹介されるべきだと思うか。

「強く思う」が73.3%、「まあまあ思う」が23.3%であり、ほとんど全ての寮父母が、ドイツの高齢者福祉の進歩のためには、外国の情報が必要だと感じている。しかも、「強く思う」と感じている寮父母の割合は、非常に高い。

3. 全体的考察

基本属性のなかで、年齢構成をみると、30歳代以上の寮父母の割合が高くなっているのが特徴的であることが分かる。ドイツでは、1960年代に老人介護士の専門家養成が始まり、そのとき、子育ての経験のある主婦が養成の対象となっていた。しかも、その後もこの影響がみられ、1989年の報告によると、老人介護士を目指す45%は子育てを終えた女性か、もしくは他の職種からの転職者であるといわれている⁹⁾。したがって、このような歴史的経緯から、調査対象となった寮父母の年齢も30歳以上が多くなったと考えられる。

介護を選んだ動機については、「人の役に立つ仕事がしたいと思った」の回答の割合が多かった。これは、キリスト教施設の隣人愛的思想に加えて、高齢者介護の歴史のなかで、大きな実践的役割を果たしてきた人々が教会の修道女であったという歴史的事実も¹⁰⁾、寮父母の介護の動機に影響を及ぼしていると思われる。

ドイツの介護スタッフは、職場の環境に満足し、あまり転職を考えていなかった。これは、一つには高齢者介護の仕事が企業のように倒産によって失業することがなく、ある程度の安定した収入が得られることも回答結果に影響を及ぼしていると思われる。そこで、最近の傾向として、失業者や海外からの移住者が高齢者介護を目指しているといわれている。

次にドイツの寮父母は、介護のあり方に対する評価としては、施設や介護職について必ずしも好ましいイメージをもっていなかった。たとえば、寮父母の多くは、高齢者介護の場所や終末期の場所として、施設よりも在宅をあげ、そして地域の住民が高齢者ホームに対して好意的にみていると感じていなかった。また、彼らは介護に対する社

会的評価を熱望する気持ちが強かった。このことから、ドイツでは、高齢者介護の業務が社会的に低いものであると考えられているようである。これは、ドイツの高齢者介護に対する歴史的背景が影響を及ぼしていると思われる。つまり、ドイツでは、高齢者介護は伝統的に家庭で行うべきであり、施設入所者は社会的落後者を意味すると考えられ、高齢者ホームに対しても好ましい印象はもたれなかったのである¹¹⁾。したがって、老後を迎えたとき、寮父母から何を期待するかという質問に、「何も期待しない」という回答した寮父母スタッフには、このような歴史的背景も影響を及ぼしているであろう。しかし、1995年度の介護保険の実施により、社会全体に介護の関心が高まり、高齢者介護に対するイメージも変わりつつあるのではないと思われる。

他職種との連携については、約63%の介護スタッフが介護の仕事が看護婦に従属するものではないと回答していた。一方、筆者がわが国の特別養護老人ホームの寮父母に対して実施した同じ質問では、約42%が従属するものではないと回答し、逆に従属すると回答した割合が高かった。ドイツの場合、介護の業務が看護から派生した専門職であり、かつ看護職との競争的な職業意識が回答結果に影響を及ぼしているのではないと思われる。現在、ドイツでは、老人介護士の資格を看護婦(士)や理学療法士と同等な資格をもたせるために、養成期間を2年間3年間に延長する動きが報告されている¹²⁾。

ドイツの高齢者福祉が外国の高齢者福祉の影響を受けているかどうかという質問については、明確な傾向が示されなかった。ヨーロッパ諸国の場合、多くの国々が独自の文化、言語、歴史的背景をもち、お互いのに影響を及ぼしながら、かつ頑固に自国の文化、国民性を保持しようとする傾向がみられる。ドイツの場合も、近隣の社会福祉国家の理想的モデルといわれるデンマークやスウェーデンの影響を受けながら、同時に自国のアイデンティティを失わずに、ドイツ独自の社会福祉を進めて行こうとするのである。したがって、寮父母

は、ドイツの高齢者福祉の進歩のためには、外国の高齢者福祉の情報の必要性を認めるが、ドイツの高齢者福祉が外国の高齢者福祉の影響を受けていると認めようとしないのである。

調査結果の全体として、ドイツの高齢者福祉施設のスタッフは、介護に対する強い動機づけをもっているが、社会的評価には不満をもっていた。今後、ドイツにおいて、介護職の社会的地位を高めることが社会福祉の1つの課題となるであろう。

引用文献

- 1) 古瀬徹：外国の高齢者介護、高齢化社会と介護福祉、一番ヶ瀬康子、仲村優一、北川隆吉編、ミネルヴァ書房、京都、78-94,1991.
- 2) デューク.M：西ドイツにおける社会的高齢者介護、高齢者介護の国際比較、全国社会福祉協議会編集、中央法規出版、東京都、7-31,1991.
- 3) ハインツ.M.：東西ドイツ統合における高齢者ケア政策の動向、高齢者ケアの政策理念と計画、全国社会福祉協議会編集、中央法規出版、128-146,1995.
- 4) 柄本一三郎：新介護システムと介護福祉士制度、介護福祉教育,2,(1),2-5,1993.
- 5) 古瀬徹、塩野谷祐一編、先進諸国の社会保障、ドイツ、東京大学出版会、1999.
- 6) 西ドイツ、欧米福祉専門職の開発、古瀬徹、京極高監訳、全国社会福祉協議会、96-116,1987,
- 7) メックス.K, シュミット.A:ドイツ介護保険のすべて、榎木真吉訳、筒井書房、東京都、1996.
- 8) 本沢巳代子：公的介護保険、ドイツの先例に学ぶ、日本評論社、東京都、1996.
- 9) 春見静子：介護人材育成—ドイツ—、高齢者ケアの担い手、小田兼三、古瀬徹編集、中央法規出版、東京都、254-270,1993.
- 10) Köther, and Gnam: Altenpflege in Ausbildung und Praxis, Thime, 51-75, 1993.
- 11) 三原博光：介護の発展、介護概論、西村洋子

編集、メヂカルフレンド社、東京都、17-35,1999.

12) 三原博光：公的介護保険と介護マンパワー対策、Tomorrow,12,(2),32-35,1997.

(註記) 本稿の作成に当たり峯本佳世子(大阪薫英女子短期大学)氏にデータ収集面でご協力をいただいております、記して謝したい。

SUMMARY

—A research on perceptions of carework by careworkers in nursing homes and residential homes for the aged in Germany—

Hirimitsu Mihara
Masahiro Yokoyama

This study focuses on perceptions about carework by careworkers in nursing and residential homes for the aged in Germany.

Thirty careworkers in nursing home and residential homes were selected as research samples. The research showed that most careworkers had high motivation for care the elderly, and that they were satisfied with the labor environment in the facility in which they worked, and thus felt no comparison to change to another field of employment. The result also showed that they felt that it is better for the aged to live in their own home than to stay in a nursing home.

Furthermore, these careworkers felt that the social status of carework is not high. It is necessary that the social status of carework should be improved through the movement of careworkers and social workers in Germany.